

一個の洋灯を先導に翁は祈りの庭に出かけられました。私達の方へ合掌恭礼して席に着き乍ら、「私の太鼓はあれでよいのかい、私も唱へる看葉をも御稽古し度い」と仰せられました。興津師は「ハハ」と支け答へました。私達が日本から思ひ込んで印度に贈らうとした御太鼓も御題目も、翁は皆取入れてしまはれようとするのでした。

## ガンディー翁に与ふるの文

藤井 行勝

昭和八年十月四日

南無妙法蓮華經

私は大日本帝国に生れた、教主釈迦牟尼仏陀の御弟子であります。藤井行勝と号けます。我大日本帝国は、約一千三百年以前に仏教が伝はつてから已来最近に到るまで、国を挙つて上下咸く仏教を信じて來ました。支那に出来た儒教や道教やも伝はりましたけれど、其等は單なる文学や哲学や倫理学の一方面の文明を教へてくれたのに止りました。日本國の宗教としては唯だ純一に仏教のみであつたと申す事が出来ます。日本國の所有する文明は一として仏教を外にして語り得可きものは有りませぬ。印度の仏教は實に日本民族の文明の母胎であります。斯の如く仏教に依て一千三百年来教育せられた我等の精神より見れば、仏教は印度のものでもあるとも云へるし、又日本のものでもあるとも云へませう。仏教から見れば其教化の行はるる所は、何れの國民も皆仏陀の一子弟であり、其國は仏陀の一邸宅であります。私達は何等の力をも持たぬ單なる乞食の一名両名に過ぎませぬ。何等の為し能ふ所もありません。けれど仏教を通じて此印度の国に負ふ所の恩恵を想ふ時に、朝に夕に感謝の心を展ぶることを忘れられないであります。

私達が仏教國の仏弟子として仏教の發祥地たる印度に詣りましても、私達を仏弟子として歓迎してくれたものは荒廃頽落した仏陀の靈蹟に啼き喚ぶ猿猴の外には何物もありません。仏陀の物語を俱にする人さえ三億余万の印度

の人に於て全くありませなんだ。私達が仏陀の經典の上で拝んだ印度に、初めて足を踏み込んだ遠い海外の旅の身には、恐らく此国は印度とは別の国では無からうかと疑はざるを得ませぬ。その疑はただに印度に仏教が亡くなつて居ると云ふ斗りで無く、國家社會教育産業の総ての方面に於て、此国が曾て仏教を生んだ印度であるか、或は外の印度ではなからうかと疑はざるを得ませぬ。

日本も、海陸遙に数千万哩の外に隔て位置せるのみならず、近代に到る迄數百年間永く鎖國の方針をとつて來たので、外国と交通貿易することもなかつたのです。其上、潮干にあらはれ満潮に隠るる程の小さい若干の島から成つた国であるから、外国には甚だ識られて居りませぬ。或は日本は、支那の領土の如く考へられ、或は高麗の一部分の如くにさへおもはれて居つたのです。然に極最近、満洲問題がジユネーブの國際連盟に於て論議せらるるに由て、遂に満洲國の創立となり、日本國は連盟を脱退するに至つて、いよいよ印度の人達の日本に対する觀察が益々混乱したやうであります。日本の处置は、連盟規約に背くとか、平和の精神に反するとか、侵略手段をとるとか、弱小国を圧迫するとか云ふ様な批難を、全世界の国々の人々から被りました。併乍ら日本の与論は上下一致して此の如き批難を顧みませなんだ。たとひ日本は自ら孤立の位置に立たねばならぬとしても、たとひ全世界の戦闘的強制に逢ふとも、日本は自ら信ずる正義を護る為に、応に為すべき事を為さねばならぬ。結句孤立の位置に立つた日本は、世界の批難の標的となつた日本は、遂に印度の人達からも忌嫌的ともせられました。誰れ一人として日本は平和を愛する國であるとは云ふ者がありませぬ。

日本も眞実の日本の正体を印度に告げねばなりませぬ。印度も眞実の印度の正体を日本に示さねばなりませぬ。仏教を産んだ國の印度と、仏教を育てた國の日本との間が、相互に理解せんと欲すれば互に理解し得ることは容易から

ねばなりませぬ。私は、仏典の中で見た印度の正体を聖ガンディー翁に就て見出さうと期待して居ります。印度文明の復興の為に、印度民族の幸福の為に、世の中で諸々の捨て難き財宝、妻子、名譽、地位を捨て、結句身命を捨てて真理の為めに屈辱と苦労とを甘んずる人達に就て、印度の眞実の正体を見出さうと期待して居ります。同時に私達は、日本の眞実の正体を、日本の仏法を伝へる事に依て、印度の人へ示したいと思ふて居ります。日本は面積から計れば小さい国ではあるけれども、建国已來二千六百年來、未だ曾て他国の侮を受けた事が無いから強國と称す可きは当然であります。強國ではあるけれども建国已來二千六百年、何れの国をも侵略した事はありません。ただ昔の時に支那と高麗と戦争した事が一、二回ありますけれどもそれは何時も日本國の滅亡を救ふ為の戦でありました。世界の歴史の上に何れの国か日本よりも勝れたる平和な歴史を有する國家を見出し得ませうか。

日本民族は本来神道と申す自らの宗教を持つて居りました。一千三百年以前に仏法が伝はるや、其長所を認めて国を挙げて仏教に帰依しました。支那に始まつた孔子の儒教、老子莊子の道教も、日本に直ちに弘まりました。是等の宗教は日本に於て完全に一体になりました。日本民族の心の中に於ては、各宗教の間に何等の偏執差別も持たずして、齊しく我が民族精神の心の光と致しました。日本民族が宗教的に愚鈍であつては、到底斯の如くいかなる宗教をも受込むことは出来ませぬ。

今の日本には軍備もあれば産業もありません。併乍ら日本は、軍備の為の日本で無く産業の為の日本で無くして、仏陀の滅後二千年を過ぎて世界に仏法の眞実の福音を宣傳するが為の日本であり、世界に日本民族精神の光を以て織り出したる日本仏法を伝へんが為の日本であり、全世界を転変して清淨安樂平和の國土となさんが為の日本であることを印度の人に告げねばなりませぬ。それは日本仏教の開祖日蓮大聖人に依て南無妙法蓮華經の一言に結要せられま

した。南無妙法蓮華經と称へて太鼓を打つことが其入門でもあると共に、又其堂奥どうろうでもあります。

私は先年日本国に在るの日、聖翁ガンディーの著述を日本語に翻訳された書物に由て見ました。其中に「宗教の信仰心なくしては其の国家に対する愛国心は有り得ない」と云はれたのを読みました。されば日本国が強いのは国民が皆燃ゆるが如くに國を愛する心に充たされて居るからであります。日本の軍備は愛国心が姿を取つてあらはれたものに過ぎませぬ。軍備に用ふる飛行機の名をば皆愛國号第一、第二等と号けております。

日本民族の愛国心は一面宗教的信念となりました。軍備の国家を護るのは一旦緩急ある時に限つて役立ちます。平時太平の代に於ては、國家の基礎を泰山の動かざるが如く堅固に維持するが為には、全国民が親密にして秩序あり、平和にして勇猛なる精神的訓練を、全國同一の指導原理に由て施さねばなりませぬ。それは國を護るに適當なる宗教の建立であります。愛国の至誠は即ち宗教の信念であり、宗教の信念が即ち愛國の至誠である時に、其國家の安危は其國の宗教の可否に由ると断ずることが出来ませう。其宗教の優劣浅深は、哲学的な範囲よりも寧ろ其國家の盛衰興亡の実際的な影響に由て決定することが出来ませう。それ故に宗祖日蓮大聖人は、

「國は法に依て昌へ、法は人に因て貴し」

と仰せられました。國家の繁昌するには其國に行はるる宗教の教法が正しくなければならぬ。正しき教法は國民の熱烈な信仰に由て、應に其威徳が顯はれると申す意味であります。

私等の唱ふる「南無妙法蓮華經」と申す言葉の中の「妙法」とは薩達磨サダマの翻訳であります。正しき真理と云ふことあります。それは人間が信仰すべき宗教的教法であります。「蓮華」と申す言葉は芬陀利伽ブンダリーカであります。蓮華は即ち國土の莊嚴せられた姿であります。「經」と申す語は修多羅スートラであります。いかなる時代の変遷にも、いかなる聖人

が出現しても、いかなる魔の破壊にも、毫末も此教法に説かれた真理を変更することが出来ないと云ふ意味であります。それは結集された仏陀の經典の名であります。真理に対する信仰心、國土を莊嚴する愛国心、此両者の一致した有様を仏陀の妙法蓮華經と名付くる經卷に説き顯はされました。「南無」とはナマスカールの古代印度の原音を其儘に用ひたものであります。真理に対しても敬礼し、國土に対しても敬礼し、經典に対しても敬礼すべき事が教へられました。敬礼は信仰心の表現であります。南無妙法蓮華經と唱ふることは、愛国の至誠の叫びであり、真理を把握する歡喜であり、仏陀の福音を世間に伝ふる演説であり、從順なる敬礼であります。

太鼓を擊つ事はもともと仏陀の經典、特に法華經の中に親切に示された樂器であります。法華經の文字が總て約七万言ある中に於て太鼓に関する文字が實に三十個所以上もあります。しかも日本國の神話の中に、「一時暗黒の世界が続きました。諸の神様達は一所に集まつて光の神様を大磐石の中から呼び出されました。その時に鶏を集めて鳴声をたてさせました。若い女神が踊りつつ鼓を鳴らされた。其音に由て光の神様が現はれて、長夜の闇が晴れた」と云ひ傳へられております。それで日本の神様の前には必ずお祈りの為の太鼓が備へられます。その太鼓は小供も老人も女も男も、いかなる階級の人も誰れでも擊つてお祈りをすることが出来ます。此の樂器の音が日本民族の光を求むる心の発現であります。日本民族の悲哀、苦痛から逃れんとする祈りの声であります。真理の光明を求めて、現実の苦痛の世界を平和な淨土にたて直す意味であります。太鼓の音は、何時明るくなるともしれぬ長い夜の永遠に連続せんとする黒い漆の様な闇の中に、限無く眠に耽つて居る人達を呼び覚まさんと欲する神様の働きの表現であります。簡単な言葉の南無妙法蓮華經と唱ふる心持を簡単な樂器に由て表はすのであります。

佛教に依て育てられた日本民族、日本民族に依て持たれた佛教、其佛教の佛弟子が、今日荒廃せる仏蹟の印度を

莊嚴せんが為に、仏陀の教法に副へて捧げんと欲する一輪の花を、仏教を産みし印度の人々に受取て貰ひ度い。それは私達の短い骨を広い印度の野原の何所にか埋めさせて頂くことであります。私達の骨が動く間はどんなことでもして印度の人の為に働き度いと思つて居ります。印度の国に旭の光を招かんが為にいかなる屈辱をも苦痛をも堪へ忍ぶ氣高い人達の如く、私達も又いかなる屈辱をも苦痛をも堪へ忍ぶ覺悟を持つて居ります。乃至それが為に身命を捨つることが有つても決して厭ひませぬ。喜んで身命を捨てませう。祖国の日本國には再び帰り来つて日本の土を踏むことは有りませぬと云つて、已に日本國に別れを告げて來た者であります。私の余命も残る所は僅かになりました。一日も早く目的に向つて進みませう。

日本の仏法の開祖日蓮大聖人は多くの著述の中で尤も肝心な書物を立正安國論と題されました。此の著述を以て當時の執權を諫言せらること三度に及びました。其度毎に或は斬罪に処せられ、或は遠島へ流され、或は暴徒に襲撃せられました。立正安國論の中には「國家の諸の災難を未前に防ぎ國民の生活を永く安樂におかんが為には、数多の宗教の中に於て最も優れたるもの、最も正しきものを撰ばねばならぬ。それは仏陀の教法の中でも特に妙法蓮華經が最第一である。仏法の中の最第一の妙法蓮華經を一心に受持して、其外の一切のものを皆捨てねばならぬ」と申されました。危難の逼れる國家を救ふて永く國民を安穩ならしめ度いと思ふ日本民族の愛国心の結晶は、遂に仏陀の教法八万四千と呼ばれる沢山の中から、唯だ一言の妙法蓮華經を看出されたのであります。宛も愛国心が武装する時に精銳にして威力ある武器を発明して國難を護ると同じであります。

併し初の間は、不幸にして時の執權を初めとして誰れ一人も日本國の中に於て、日蓮大聖人の立正安國論を信ずる者は有りませなんだ。日本國の一切衆生は皆其説く所を疑ふのみならず、却て之を嘲弄し憎悪し宛も親の怨の如く怒

りました。されば日蓮大聖人の御一生は、仏教歴史凡そ三千年間に亘つて無類の惨酷なる迫害と受難とで始終したのみならず、其弟子信徒も又但に、或は牢獄に或は殺害に、其迫害と受難とを忍ばねばならなかつたのでした。

それより已來、凡そ七百年の今日まで、其宗門の歴史はいつも血を以て染められて來ました。日本國の民族が誰も愛国心が強い丈けに、國家の宗教信仰の決定に就ての意見の相違は、遂に斯くの如き残酷なる迫害の歴史さへも織り出さねば止まなかつたのでした。此の迫害と受難との永い間の歳月を過ぎて、今日漸く日本國は日蓮大聖人の立正安國論を信ずることが出来るやうになりました。

今上天皇は特に日蓮大聖人に立正大師の謚号<sup>じょうごう</sup>を賜はりました。立正とは立正安國論の題号に拠られたもので、其意味は最も正しき宗教を立てると言ふことであります。日蓮大聖人の立てられた宗教が、國家を救ふことに就て尤も正しい信仰であることを認め遊された所以<sup>ゆゑ</sup>であります。

私は日蓮大聖人が立てられた南無妙法蓮華經の仏教が、決して容易く印度の人に信受せらるるものとは予期して居りませぬ。已に私が印度に渡つて三ヶ年に満つる歳月の間に於て、未だ一人の印度の人に之を信仰せられた人を知りませぬ。私の不徳の為め斗りで無く、此妙法が本来難信難解の甚深なるが為であります。仏陀は既に「此妙法を信仰することはヒマラヤ山を負ふて太平洋を渡るよりも一層の困難だ」と説かれてあります。日蓮大聖人は「汝若し此妙法を容易く信受することが出来るならば、此妙法は浅薄なものでなければならぬ」と仰せられました。十年の後、二百年の後、七百年の後に到るとも、私が日本の仏法を印度に還し度いと願ふ志は退屈致しませぬ。印度に眞実の安樂が来るべき其日には必ず印度の人達に此日本の仏法が信ぜらるるで有らることは、私には火を瞭るよりも明かであります。

妙法蓮華經の中に「常住不滅の仏陀は一時遠く他国に往つた。あとに残つた沢山の小供は、他人から欺かれて毒を飲んで血を吐き息を断つて、地に転げてもだへ苦しみました。おお、我父親は何所へ往つた、早く誰か来て助けて下さいと虚空を掴んで泣き叫びました。やがて父親は家に還つて、小供の悶へ苦しむ有様を見て大に驚きました。父親は良い医者でありましたから、早速小供の飲んだ毒を解消せしめんが為にあらゆる薬を集めて一大良薬を調剤して小供に与へました。此良薬を飲んだ小供は癒つて苦痛から免れましたが、已に毒氣深くまはつた者は体も傷み爛れ、心も狂ひとぼけ、敢て此良薬を飲まうとしませぬ。父親の慈愛は此良薬を小供に飲まする方法を考へて、遂に苦しむ小供を離れてまた余所へ姿をかくすべく余儀なくなりました。其の時子供は無理を云つて薬を飲まずに駄々児をこねたものの、父親が居なくなればそこには苦痛を訴ふる誰れも居りませぬ。苦痛の重なるにつけて今更乍ら、お父様どうぞ帰つて下さいとおめき叫ぶやうになりました。毒の為に失はれた小供の心が少し宛取り戻されました。父親は時を計らつて先づ使を遣はして、苦しむ小供の為に作った大良薬を飲ましめました。小供は、曾て我父の良医が我等が為に調剤してくれた大良薬を、今や余所から父の使として来た人のすすめをうけて飲んで、体は永い間の苦痛がなほり、心は顛倒した狂乱が覚めました。父の良医はその時に、いとほしい子供を残しておいた我家へ飛ぶが如くに帰つて来ました。其経文に『還來帰家』と説かれてあります。今日迄他国に往て居つた釈迦牟尼仏陀は自らの生れた國、自らの住んだ家、自らの子孫の所へ今日は還り来られねばなりません。帰らうぞ、帰らうぞ、我が國に、我が家に』と説かれてあります。

此経文の、父の使となつて毒に苦しむ印度の人に其父の薬を飲ましむる者は、日本の仏弟子、日蓮大聖人及び其弟子であると彼れ自ら深く信じて其使命を高調遊されました。其仏陀の使が印度へ遣はさるる時代は教主釈尊御入滅後

二千年を過ぎての後であると、分明に法華經の中に幾ヶ所も指示せられてあります。時代を以て考ふれば今將に予言せられた時は過ぎなんとして居ります。印度の人の三億万の呻きは世界の隅々に聞えて居ります。どうしたことか未だ曾て日本国からも他の仏教国からも仏陀の使として、「妙法蓮華經」の大良薬を飲めよとすすめに來た一人もありません。仏陀の金言が妄語でないならば、其使者も必ず遠からぬ間に此印度に來ることと信じます。その時印度の人が此の良薬を飲んで、今日の苦痛から免れることと信じます。私は日本から仏陀の使が印度に一日も早く来らんことを望んで、此仏陀の予言を引用しました。此の予言の経文が信ぜらるる時に、私には、印度の人が挙つて南無妙法蓮華經と唱へらるる日の到来することは、又容易く信ぜらるのであります。

噫々、大悲窮り無き救主仏陀よ、如来が再び如来の家、印度の国に還り来らせ給ふ可き御約束の時代は、今將に過ぎなんとして居ります。印度の国に早く帰つて来て下さい。此の祈の一言は日本の仏弟子の信念であると俱に、それは如来の子孫の三億万の人々の渴いて水を求めるが如くにあこがれて居る願ひであります。現今、国民を塗炭の苦患から解脱せしむべき道を求めて悩んで居る印度の人の為に、此の日本の仏法を伝へることが最も親切なる日本国の同情であり福音であると信じます。(以上)